

玉作りのムラ

身体装飾という言葉があります。これは、服飾・アクセサリー・化粧などの総称です。

私たち現代人は、身だしなみとして、これらの装飾を日常のこととしていますが、古代においてはこうした装飾の一つ一つに特別な意味がありました。特に、貝・石・ガラス・金属など当時貴重だった材料で作られた首飾り・頭飾りなどの玉類は、社会的地位、役割などを示すシンボルとして重要なものでした。

縄文時代には、翡翠製の大珠や琥珀製の玉、滑石製の耳飾りなどが作られましたが、こうした装身具は、ムラの中でもごく限られた人々が身につけたものでした。弥生時代には、朝鮮半島の影響を受けて、石製とガラス製の玉類が流行します。石製玉類の素材として、緑色凝灰岩製の管玉・勾玉がたくさん作られるようになります。

地域を代表するような大きなムラで玉作りをするようになり、出土例も増えます。それでも、誰もが玉で身体を飾ることができるというわけにはいきませんでした。

ムラの多くの人々は、水田耕作に従事しますが、その反面、計画的



玉作りのムラ（久御山町市田齊当坊遺跡）

に作業でき、水田耕作作業から離れた余剰が生まれ、鉄製品の加工、特殊な調度品、身につける装飾品などを生産する専門集団が生まれるようになります。

専門集団は、その製品の材料を仕入れ、特殊技

術によって装身具を製作するムラも生まれます。玉・鉄・塩などに従事する専門集団のムラが生まれるのもこの弥生時代です。

今から2,000年以上前の弥生時代中期（中期中～後半期）に、こうした玉類を専門に作っていた集団のいたムラが、京丹後市弥栄町なぐおか奈具岡遺跡と久御山町市田齊当坊いちださいとうぼう遺跡で見つかりました。

奈具岡遺跡は、日本海に注ぐ竹野川右岸の狭い谷間にあり、緑色凝灰岩や水晶を材料として管玉や



水晶製玉類の原石から製品まで（奈具岡遺跡）

勾玉、小玉などいろいろな種類の玉が作られていました。玉を生産した竪穴式住居跡の遺物を観察すると、水晶を中心に玉を生産した工房、水晶よりも加工がしやすい緑色をした碧玉で玉をつくる工房、原石を管玉に作りやすいように荒割りして管玉に加工する前段までの作業をする工房など、それぞれの竪穴式住居内で分業をおこなっていることがわかりました。また、日本では数少ない鉄で玉作りの専用工具を作っていたこともわかりました。奈具岡の玉作り工人達は、広い範囲から貴重な材料を手に入れ、高度な技術を駆使して玉作りをしていたことが明らかになりました。

同じ玉作りの工房跡に久御山町市田齊当坊遺跡があります。この遺跡の竪穴式住居跡からは、多量の碧玉製の未製品や玉に加工するまでの石ノコや玉を磨く砥石、糸を通す穴をつくる石針など玉作りの工程を考える資料が多量に出土しました。

（田代 弘）